

た。アガの兄フサインと帖木兒との關係は、永く彼を不幸の中に陥らしめたものであつたが、當時フサインも既に王と戦つて敗北した結果、行方も分かぬ落人であつた。帖木兒は先づ之れを尋ね出して計を共にしやうとした。アル湖の南邊、アム河の下流域をその頃カレズム國といひ、其の附近に横たはる沙漠をカレズムの沙漠といふた。近くは基華汗國の名で露西亞の中亞侵略史に名高い地である。帖木兒は此の沙漠の中で義兄フサインに邂り逢ふたが、今此の兩人に従がへるものは僅かに六十人にすぎなかつた。然るに此の僅かの人數を以て大膽にもカレズムの都ウルケンジを襲撃して、こゝに一種小説的な戦が開かれた。彼等の一隊は終に僅かに十二人迄に打ちなされ、フサインの馬は傷を受けて斃れてしまふ。彼の妻は直ちに自分の馬に夫を乗せて、自からは帖木兒の妻と相乗りし、あたりの小高き丘上に退いて防いだものゝ、數ふれば残るは主従男女を合せてたゞの七騎、それでも一方の血路を開いて逃れはしたが、そこは名にし負ふカレズムの沙漠とて、一掬の水も見當らない。飢と渴とは容赦もなしに一同の身に迫つて来る。やつとのことで或る羊飼の男に出會つて、その恵みによれる一片の羊肉を炙つて食ふことが出来た。「吾等の喜びは名狀することが出来なかつた」とは此の際における彼の告白である。されど非運はまだ彼等に縈つた。數日糧なしに沙漠をさまよふて、漸やく見出した一寒村に此の後の一ヶ月をすごしたが、終には剽掠を業とせるトルコ人等の手に落ちて、帖木兒夫妻は無殘にも牛小屋の中に押し込められ、毒蟲の責苦に遭ひながら六十二日を此の中にすごさねばならなかつた。「刑罰の爲め、自衛の爲めに、假令人を殺さねばならぬしても、牢屋と鎖とでは苦しめまい」と彼が神に誓つたといふて居るのを見ても、如何に此の幽閉が苦痛であつたかを想像することが出来る。